

二松学舎大学第一三二回大会 大会次第

■日時 二〇二六年七月一日(土) 一三時～(開場は一二時半)

■開催方式 対面(講演のみオンライン[YouTube]兼用)

■会場 二松学舎大学 九段キャンパス一号館

※開会式は二〇一教室で行います。最初は、二〇一教室にご参集ください。

■パネル展示(谷島貫太ゼミナール)

◎神保町をウィキペディアする——大学ゼミでのウィキペディアタウンの実践

■研究発表(二〇一教室、二〇二教室)

◆201教室(一三時一〇分～一五時二五分)

◎石田 桜子『蜻蛉日記』における「みみらくの島」再検討」

◎佐藤 果音「二〇〇〇年代以降の文学に見られる「きょうだい児」の表象についての研究」

◎原田 珠希「動詞「かける」の多義をめぐって——連語の構造的なタイプをてがかりに」

◎田崎 舜『古事記』受容史における『鼈頭古事記』——「読み」の転換として」

◆202教室(一三時一〇分～一四時四〇分)

◎有永 真瑞『管子』旧注の体裁と現存状況について」

◎張 磊『三国志演義』における『三国志平話』の利用——孫堅・孫策の物語を例に」

◎岡野 康幸「清水赤城の儒学及び兵学観——大橋訥菴理解のために」

■パネル発表(二〇一教室 一五時二五分～一五時三五分)

◎谷島貫太ゼミナール「神保町をウィキペディアする——大学ゼミでのウィキペディアタウンの実践」

■講演(二〇一教室 一五時五〇分～一七時二〇分)

◎田中 聡「大学と地域の連携による京都地域史料の研究」

■総会 一七時三〇分～一八時(二〇一教室)

■懇親会 一八時一〇分～(二三階ラウンジ)

要旨集

〈研究発表〉二〇一教室

『蜻蛉日記』における「みみらくの島」再検討

石田 桜子

『蜻蛉日記』上巻には、死者の姿が見える「みみらくの島」という超自然的な伝承が記述されている。これは作者の母が山寺で亡くなり、葬儀などを済ませ、悲しみに暮れている場面での僧たちの噂話として記述されている。日々の体験を記載する日記において、「みみらくの島」の伝承への関心は特異な話題であるが、そこには問題が存在する。

従来、『蜻蛉日記』における「みみらくの島」は、いくつかの上代文献における「ミネラク埼」と同一のものと考えられる傾向があった。しかし、上代文献の「ミネラク埼」は遣唐使などの「出向地」として記載されるのみであり、伝承の記録は見られない。次に、「みみらくの島」とは校訂された本文であり、諸本間には異同が多数認められる。特に、現存諸本の中で比較的善本とされている御所本では、「みえくちの島」「みくら山」「みくら島」とある。

そこで、本研究では、『蜻蛉日記』における校訂本文「みみらくの島」は、本来「ミネラク埼」とは関係のない場所であると考え、御所本の通り「みくら山」であるとするべき可能性について検討する。

(いしだ・さくらこ／本学文学研究科博士前期課程)

二〇〇〇年代以降の文学に見られる「きょうだい児」の表象についての研究

佐藤 果音

「きょうだい児」とは、病気や障害のある兄弟姉妹のいる人のことである。日本では一九九八年、障害や慢性疾患のある人の「大人のきょうだい」を対象とした集まりとして「きょうだい支援の会」が活動を始めた。二〇〇一年に日本初のワークショップが開かれ、子ども「きょうだい」に関する活動が各地で始まった。そうして「きょうだい児」という言葉は、日本社会において徐々に浸透しつつあり、そのモデル的イメージも広く共有されるようになっていく。

本発表では、二〇二二年に『文藝』から発表された、新胡桃『何食わぬきみたちへ』を取り上げる。物語では、公立高校の分教室に通う障害を持つ生徒が、普通級の生徒からいじめを受けたことを契機として事件が巻き起こる。これらの出来事を傍観してしまった「伏見」と、いじめを受けた生徒の兄弟姉妹である「敦子」が、一人称の語り手として登場し、それぞれの視点から事件が語られる。本発表では、「伏見」と「敦子」の語りに着目し、それぞれの語りの特性と物語構造との関係を分析することで、「きょうだい児」の表象可能性について考察する。

(さとう・かのん／本学文学研究科博士前期課程)

動詞「かける」の多義をめぐって

—— 連語の構造的なタイプをてがかりに

原田 珠希

動詞「かける」は、「(壁に) 絵をかける」のような具体的な物に対する働きかけの他に、一種の再帰的な動作を表す「眼鏡をかける」、いわゆる慣用句と認められる「電話をかける」「迷惑をかける」など、さまざまな用法を持つ多義語である。

修士論文では、奥田(1983)の連語論の枠組みを土台に、現在も続く連語についての様々な研究、茶谷(2023)や中山(2024)などから学び、動詞「かける」の語彙的意味構造を、共起する名詞との連語関係の分析を通して示したい。最終的には国語辞書にみられるような記述内容にとどまらず、連語論で「とりつけ動詞」として位置づけられる「かける」を核とする二単語以上の組み合わせ「連語」を[BCWJ]から採集した実例を整理し、その枠組みを再検討することによって、「かける」がどのような名詞と結びつき、どのような多義構造を形成するかを明らかにする。

本発表では、主に「かける」が《具体物》をあらわすヲ格名詞とむすびついてその意味が具体化される、「NニNヲ かける」の構造(「対象へのはたらきかけをあらわす連語」の実現されている構造)について報告する。

(はらだ・たまき／本学文学研究科博士前期課程)

『古事記』受容史における『黿頭古事記』—— 「読み」の転換として

田崎 舜

本発表は、『黿頭古事記』を対象として、『古事記』受容史における『黿頭古事記』の影響を、その本文・跋文・注釈などを分析することにより明らかにするものである。

『黿頭古事記』は、伊勢神宮の神官である度会延佳が著した頭注形式の注釈書で、跋文から貞享四年(1687)の成立だと考えられる。『黿頭古事記』が登場するまでは、寛永二年(1644)に出版された、注が無く、本文の誤りが多い『古事記』が読まれていた。ところが、『古事記』を読むという行為の水準が、『黿頭古事記』が世に出ることにより変化した。

『黿頭古事記』は、本文校訂を行ったことや、簡易な注を付した点などが評価されている。だが、本書の出版以前に『古事記』の校訂本文が存在しなかったことを考えると、校訂本文が既に存在する現代の研究の評価をそのまま当時の価値とすることは問題である。

『黿頭古事記』は、寛永の『古事記』をたたき台として、本文を校訂し文献学的な根拠を示したことで、『古事記』を「古典」として位置付けることを可能とした。

この点について、本発表では『黿頭古事記』の本文・注釈・跋文などを分析することによって明らかにする。

(たさき・しゅん／本学文学研究科博士前期課程)

〈研究発表〉二〇二教室

『管子』旧注の体裁と現存状況について

有永 真瑞

現存『管子』には、本文に附された旧注が伝わっている。この旧注は、「房玄齡注」・「尹知章注」という呼称をめぐる問題を含むとともに、『管子』の伝承を考えるうえでも重要な手がかりとなる。しかし、その内容を検討するためには、まず旧注がどのような体裁で伝存し、現在の範囲まで確認できるのかを整理しておく必要がある。

そのため本発表では、『管子』旧注研究の前提として、旧注の名義に関わる問題を踏まえつつ、主としてその体裁と現存状況を考察してみたい。旧注は、単に本文理解を補助する注釈であるだけでなく、『管子』がどのような形で読まれ、伝えられてきたかを示す資料でもある。したがって、旧注の内容分析に進む前に、その伝存形態そのものを整理することが必要となる。

具体的には、旧注が独立した注釈書としてではなく、『管子』本文に附載される形で伝わっている点に着目し、本文と注との対応関係、注記の置かれ方、また旧注が『管子』全体の中での範囲に及んでいるのかを確認する。これらの整理を通じて、旧注の内容を検討する際には、対象となる本文と注との関係、および注の性格・範囲をあらかじめ明確にしておく必要があることが示されるはずである。

(ありなが・しんずい／本学非常勤講師)

『三国志演義』における『三国志平話』の利用

——孫堅・孫策の物語を例に

張 磊

本研究は『三国志演義』(以下『演義』)の登場人物である孫堅と孫策を対象とし、『三国志平話』(以下『平話』)に焦点を当てて、現存最古の版本である嘉靖本における二人の物語の成立を探求するものである。

三国時代において、孫権の父兄である孫堅と孫策は、呉の創始者として、史書に多くの事跡が記されている。その一方、『演義』の成立過程において、『平話』は、通常『演義』の前段階として注目されてきた。しかし、従来の研究に見られるような『平話』が『演義』の成立に大きな影響を与えたという論が、孫堅・孫策の物語においても適切であるか否かについては、さらなる検討の必要がある。

また『平話』では、孫堅の物語は董卓討伐期に集中している一方、孫策の名は全く出てこない。つまり『平話』は『演義』への素材提供という面では限界がある。実際、「孫策の物語は『平話』を下地として、史書で肉付けするという執筆プロセスは成り立たない」とする指摘さえある。本研究では、『平話』と『演義』の二人に関する物語を抽出し、その物語の本文に基づいて、『演義』と『平話』との関係を説明すると共に、『平話』の利用法を検討してみたい。

(ちよう・らい／本学文学研究科博士後期課程)

清水赤城の儒学及び兵学観——大橋訥菴理解のために

岡野 康幸

一般的に「尊王攘夷主義者」として喧伝される大橋訥菴（一八一六～一八六二）の思想には、実父清水赤城（一七六六～一八四八）からの影響が指摘されている。赤城は儒者であると同時に兵学者という側面も有しており、（赤城自身の認識は儒者であるが、世間的には兵学者という認識が強い）訥菴の思想をよりよく理解するためには、兵学の理解も必須であり、訥菴の兵学の淵源は赤城ということになる。しかし、従来の赤城を論述したものは伝記の範囲にとどまり、赤城の儒学・兵学観や儒学と兵学の関係性について論述したものは見当たらない。

本発表は、大橋訥菴における兵学の位置づけについて、訥菴書簡及び訥菴の弟子である並木栗水（一八二九～一九一四）の証言から考察を加えることで、訥菴における兵学の位置づけを探りたい。また、清水赤城の儒学・兵学観及び儒学と兵学の関係性については、『大橋訥菴先生全集』所収の赤城の序文及び静岡県立図書館蔵『西洋神器説図解』だけに記されている「考證書目」から考察を加えることで、清水赤城の儒学・兵学の一端を明らかにしていきたい。

（おかの・やすゆき／群馬医療福祉大学社会福祉学部専任講師）

〈講演〉

大学と地域の連携による京都地域史料の研究

田中 聡

講演者は近年、地域住民と連携しつつ、複数の地域史料の調査・公開を進めている。またその成果を所属する立命館大学文学部の京都学関係科目に活かしている。今回はその一端を紹介し、地域と大学研究者が連携することの意義について再考したい。

（たなか・さとし／立命館大学文学部教授）

〈講演者プロフィール〉

一九六四年、札幌市生まれ。立命館大学教授。専門は日本史、京都学。単著に『日本古代の自他認識』（塙書房、二〇一五年）、共著に『差別と向き合うマンガたち』（臨川書店、二〇〇七年）、編著に『教養のための現代史入門』（ミネルヴァ書房、二〇一五年）、『学知史』から近現代を問い直す』（有志舎、二〇二四年）など多数。